

南風 こまち

じゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃ……。

取引先近くのコインパーキングで車から降りると、閑東人には聞き慣れない蝉の声が迎えてくれた。吹き付ける風は黒々としたアスファルトで焼け焦がれ、鼻から吸う空気は体温を凌駕する。かつおだしの匂いがするのは気のせいだろう。いくらここが高知とはいえ。

「なんでまたこんな季節に出張なんだよ……」

季節は梅雨明け、くませみの声がうるさい。額を、背中を、ねっとりとした汗が流れ落ちる。天を仰ぐと憎らしいほどにまぶしい太陽と、青空。西の方にはもくもくと入道雲が立っている。

そんな空を見上げて歩いていると、申し訳程度に風に吹かれている黄色く小さな旗が目に入った。何か書いてある。

「営業中……?」

俺は空から視線をずらし、旗を吊るしている軒先を見る。

「うどん屋、宮家?」

石段の上にある入り口から中が見えた。盛況だ。腕時計に目をやると、もうすぐ正午。少し時間は早いがこのでお昼にしてしまおう。

暖簾をくぐると、日差しが遮られてようやく一息ついた。打ちっぱなしのコンクリ壁の内装が余計に涼しく感じられる。ひんやりした空気を吸うと、かつおだしの匂いがした。

「いらっしやいませ、一名様ですか?」

出てきたのは彫りの深い、日焼けしたおばちゃんだ。頷く。

「カウンター席へどうぞ!」

土佐のなまりに背を押され、気が付くと俺は厨房前の

カウンター席に押し込まれていた。頭上から天気予報の音が降ってくる。今日は猛暑日になるようだ。

「はい、お茶です。ご注文は?」

今度は若い娘だ。

「え、あ、また後で」

「はい」

麦茶だけ残して猛烈な勢いで去ってしまった。メニューを見るとずらずらとうどんが並んでいる。鯉たたきうどん、みたいないかにも観光客に媚びたようなうどんは見当たらない。

「すみません」

俺は手を挙げ、さっきの娘さんが駆け寄ってきた。

「牛玉ぶっかけの冷を一つ」

「牛玉ぶっかけですね、並盛ですか?」

「ええ」

「天ぷらは?」

少し逡巡する。暑くてあまり食欲が湧かないが、午後もくそ暑い中、取引先と打ち合わせだ。良さそうなものがあった。これで精をつけておこう。

「餅天を」

「100円で飯もつけられますけど、どうします?」

おほか、こんぶ、うめがあります」

「おほかで」

「かしこまりました。肉一丁、餅付き、おほかです!」

「はあーい!」

声に釣られて厨房に目をやると、白髪交じりのおっさんがねじり鉢巻きを巻いて麺をゆでている。ぐらぐらと沸き立つ大釜は、冷房が効いている俺の席から見ても暑苦しい。よく冷えた麦茶を一息に飲み干すと少し体が落ち着いた。

がらがらと戸が開いた。

「いらつしやいませー！ 何名様、5名？ すいません、ちよつと待つて下さいねー」

「14番さん、梅ぶつかけ、こんぶでーす！」

「はあーい！」

にぎやかな店員の声や食器の音に交じって、少しばかり場違いなしゃれたBGMが流れている。カウンターと厨房の仕切りには食器や、これから配膳するうどんが並べられる。隅っこでは鯉を抱えた招き猫が手を振っている。どんなセンスだ。

「すいません、少し話してもらえますかー？」

急におばちゃん店員が声をかけてきた。有無を言わせぬ押しが強さで俺を一つとりのカウンター席へと追いやる。カウンターの向こう、厨房の大釜が遠くなつて代わりに冷蔵庫が近くなった。ばたんばたん客の出入りに合わせるように中身を出し入れするが、中には刻み葱とうずらの卵、火を通したと思しき牛肉がタップーと詰り込まれていた。

「2名様、空きましたー！ こちらどうぞぞー！」

隣に座ってきたのはこれまた色が黒い、化粧では誤魔化しきれない顔のシミが目立つおばちゃん二人組だ。

「いやあ、そらわやよ」

「あれほどがいにせられんつて言うたによー、ほんまいかんでねえ？」

「ほんま、お前のめつたねえ」

土佐の女をはちきんと言うが、この二人は典型的なはちきんなのだろう。はちきんの由来がきん●ま八個分、つまり男四人分に匹敵する男勝りな性格だと聞いた時は爆笑した。

店の混雑に拍車がかかってきた。5人で入ってきたの

は野球部の一団だろう、エナメル白かばんが背中をどんと突いた。

「お待たせしました、先にご飯をどうぞー。これはうどんのつゆです」

「ご飯？ ああ、そーいや頼んだな。前菜がご飯だよ。」

そう突つ込みつづ箸を取る。豪快な大ききの削り節に醤油を一垂らし、塩気が効いている。汗ばんだ身にはありがた。

「お待たせしましたー、牛玉ぶつかけでーす。大葉天をおまけしておきました！」

まだご飯を一口二口食べたばかりなのにもうメインが来る。せつかな店だ。土佐弁でいられ、とても言うのだろうか。どんぶりを覗き込むと煮込み肉、大根おろし、とろろ、卵、そして天ぷら。後は青ネギ。ひとつまみのすりおろし生姜の黄色は、うずらの卵の黄身を前に色褪せている。そして麵は見えない。

「大葉？」

「席を代わってくれたので、こゆつくりどうぞー！」

大学生くらいの娘はちやきちやきと言いつつレジに戻る。

「2番さんお会計でーす！」

「ありがとございませー！」

客の出入りが激しい。さつさと食べてしまおう。こんな片田舎でここまでせかせかと食べることになるとは。

これじゃ東京の昼と……いや、違うな。東京はもつと空気が雰囲気小汚い。俺はメモ帳を開き、午後の予定を確認する。スマホのメモ帳機能は後輩に勧められたがどうもなじまない。

「ええと、まずは亀泉、次は美丈夫、桂……ダバダは明日か、遠いなあ」

よく冷えたつゆをぶつかけて、卵の黄身を割り、そしてかき混ぜる。肉の色に大根おろしが染まると食べごろだ。

「いただきます」

箸で捕まえる麺はつやつやとして、口に入れるとひんやり。コシが強い。讃岐うどんだ。ここから香川へ行くとなると山を越えるため意外と遠いが、海を渡るよりは近い。

「今年はいかんねえ、ちつとも当たらん」

「わはははは、おまんはしょういられやきねえ！」

「やかましいわえー！」

背後から酒焼けした笑いが響く。振り向くとこんな昼間から男衆がビールを酌み交わしている。こっちはこれから仕事、しかも酒の商談なのに酒は飲めない。羨ましいを通り越して憎たらしい。八つ当たりのようにうどんを掻つ込むとさっぱりとした生姜の辛みが俺を癒した。柔らかく煮込まれたすじ肉も喰らう。

「で、明日はダバダからの安芸虎……げつ、反対方向かよ。岩崎の奴、どんな組み方したんだ。これ一日で回れるか……？」

使えない後輩の顔を頭から追い出して食事に戻る。ふくよかな餅に、ぱりつとした大葉の天ぷら。讃岐うどんに餅を合わせるの少し顎が疲れる。それでも箸を止めることはできない。大葉は揚げたてで、汁に浸してもまだ歯ごたえを保っている。ほんのりとした香りは、夏の太陽をさんさんと浴びた証なのだろう。

「え、やつぱ。それめつちやでかいやん！」

「そうだね？ こんなやつたがよ」

奥のテーブル席で野球部の連中が何かで盛り上がりつつある。何の話か、20年前に学生を通り越した俺には何

となく察しがついた。どこに行っても男子高校生は似たような馬鹿話で盛り上がるようだ。

ふとどんぶりから視線を上げると、天かすが目の前の器に山と盛られている。形も不揃い、大きさも不揃い、色も黄色から茶色から、たまに野菜の緑色まで交じっている。ははあ、さては店内で揚げた天ぷらの残りだな？もちもちした麺の食感に少し飽きてきた頃だ。一杯、二杯。木れんげで放り込む。麺と一緒に吸るとばりばりと花火を打ち上げたような音だ。軽快。

スマホが鳴った。呼び出し人の名前を見ると、くそお、こんな時にあのハゲ部長からか。渋々口の中を空にする。

「はい、中岡です……ええ、はい、部長、ご無沙汰しています……はい、はい……はあ、そうですね、分かりました。先方に伝えておきます。はい、はい。失礼します」

全く、毎度のことながらろくでもない要件での電話ばかりだ。まあいい、あと半年もすればあのハゲも定年退職でいなくなる。やつけはちになつて残りの肉を全部頬張る。だしの味がうまい。うまい。

そうこうしているうちに麺が少なくなってきた、汁を吸る。とろろのねばつきが口から糸を引いた。全体的に妙に味がぼやけて優しいと思つたら、とろろ、お前か。そのまま食べていると、すりおろした長芋のかけらがどんぶりの奥底から出てきた。少し芯のある歯触りが楽しい。

ふと、どんどんどんと耳慣れない音がした。厨房を見ると、さっきまで麺をゆでていたおっちゃんが生地から麺を切っている。どうやら自家製麺のようだ。粉にまみれた太い包丁が踊る。

残りの麺をまとめて吸る。口の中が硬い麺で溢れる。かつおだしの香りが鼻に抜けた。欲張りすぎたのだから、

少しむせそうになった。どんぶりを空にして、残っていたおかごはんに手を伸ばす。完食。残りの麦茶でとろろのねばつきを流し込む。

「ちそうさまでした」

「はあーい、7番様お会計ですー！」

「ありがとうございますー！」

「ありがとうございますー！」

会計を済ませる。よく考えてみると昼間から天ぷらにご飯までついたらうどんというなかなか豪華な品書きなのに、1000円札でお釣りが来た。

外に出ると、やつぱり聞き慣れない蝉時雨の下に行列ができていた。暑さは厳しさを増し、陽炎が揺らめいている。さっきは遠かったはずの入道雲が近付いている。

これから仕事かと考えると、何ともやりきれない。

……まあ、あのうどんの味に免じて許してやろう。そんな不遜なことを考えていると、かつおだしの匂いを乗せた熱風に後ろから押された。体を満たしていたさつぱりしたうどんの余韻は、南国の青空に消えていった。